

消防協会幹部會で

諸提案附議

終つて松ヶ岡で觀櫻宴を張る

石城消防協會幹部大會は昨

十二日午前八時半から平第

三小學校々庭に於て廿二ヶ

村消防組幹部約三百名參集

全員整列國旗掲揚の後人員

服装点検、規律訓練、分列

式を擧行、次いで同校講堂

で柴田平警察署長の十七ヶ

條に亘る懇篤な訓示終つて

協會長司會に下に齊藤平署

司法主任の進行係擔任で會

議に入り、左記の協議事項

並に建議事項を附議、和氣

藹々の裡に午後二時三十分

會議を終了後、第二會場松

ヶ岡公園池の端で盛大な觀

櫻の宴を張り、平藝妓連の

絢爛の舞臺姿に、咲き初

めの櫻花に魅けて生ける華

麗な「花の美」を満喫、極め

て有意義に散會した

◇建議事項

△消防幹部講習會開催に

關する件（一、二の質問

の後決定、期日未定）

△石城消防共濟會設立の

件（決定起草會は協會長

並に井上平組頭が當り會

則制定は組頭會に一任）

△福島縣消防協會共濟會

規程條項一部増補方申

明治廿九年一月七日小野
田炭礦坑夫長屋の火災で
運搬車に衝突死

△平組消防組手綠川清造

(六) 大正元年九月三日午
後十一時内郷の大穴に從

事中心臓麻痺死

△平組小頭綠川佐伯(四)大
正十二年九月廿日平町品

川白練瓦會社火災消防中
燒柱倒潰頭部に重傷死

△平組消防手伍長高田清一
郎(四)昭和八年三月十五
日平町月見町空屋火災の
際鎮火後歸宅と同時に身

心の激動から心臓麻痺死

△平組消防手堀満正(四)昭
和九年十二月二十二日平
署構内望樓で見張り中過
勞から脳貪血症を發し二
十三日殉職

△磐崎組小頭野木廣吉(一)
記五氏である

△磐崎組小頭野木廣吉(一)

記五氏である

△磐崎組小頭野木廣吉(一)

記五氏である

△磐崎組小頭野木廣吉(一)

記五氏である

△磐崎組小頭野木廣吉(一)

記五氏である

△磐崎組小頭野木廣吉(一)

記五氏である

△磐崎組小頭野木廣吉(一)

記五氏である

△磐崎組小頭野木廣吉(一)

記五氏である

△磐崎組小頭野木廣吉(一)

記五氏である

△磐崎組小頭野木廣吉(一)

記五氏である

△磐崎組小頭野木廣吉(一)

記五氏である

△磐崎組小頭野木廣吉(一)

記五氏である

△磐崎組小頭野木廣吉(一)

記五氏である

△磐崎組小頭野木廣吉(一)

記五氏である

△磐崎組小頭野木廣吉(一)

記五氏である

△磐崎組小頭野木廣吉(一)

記五氏である

△磐崎組小頭野木廣吉(一)

記五氏である

△磐崎組小頭野木廣吉(一)

記五氏である

現在で右資金が貯百三十餘
圓に達してゐると

内郷壯丁日割 石城
郡内郷村の本年度徵兵検査
人員は二百四十名であり、
検査日割は左の如く決定し

六月十四日(本籍)同十六
日(寄留)

△赤十字社本縣支部の四月中
本郡巡回診療は左の日程で
行ふ廿三日川前村

△赤字巡回診療 日本

内郷壯丁日割 石城
平商業學校では昨十二日午
後二時から新學年度第一回

父兄懇話會を開いたが今年

度役員は左の諸氏に決定し

(會長) 中野浩忠(理事) 父

兄側 赤津一 佐藤伊太

郎 學校側矢野校長 服

部教諭 猪狩書記(評議)

員) 相良皆吉 篠原保治

長瀬福彌 佐藤榮一 金

子重次 山家重吉 木村

徳三郎 柴田茂

△赤字巡回診療 日本

平商父兄會 平商人事

△田町三六當時東京市麻布

區飯片町三二石山泰仙氏

(三七)秋田縣秋田市土手

長町中丁三二小笠ナヲさ

ん(二三)

△赤字巡回診療 日本

お花は水責めにかかると
ころが助かつて假牢に入れられ、それにはさびしく番人がついた、とその日の午後二時ごろ傳法院に設けた市中取締の役所の前に雷門の方からこゝへ來たはま三十にならぬ若い男、大紋付の印半天を着て襟には白字で大清としてあり、盲縞の股引にめくの足袋・散緒の麻裏草履、盲縞の腹掛、肩へ水淺黄の手拭をかけ酔つてゐると見えて千鳥足、漸くそれを踏しめて

○「なんだ／＼傳法院に幕が張つてあるぜ、珍らしい紋だな、寶づくしだぜこいつはひつぼうか、イヤー桶に水を汲んで砂が盛つてある、ともらいかな、葬式としては珍らしい、筒袖を着た妙な奴が立つてゐるせ、異人の様な姿だな、アメリカの五月人形の様だ」

△「これ、そこい立つては叶かぬ通れ」警護の者はしかり付けた

松「何處へ通るンだ」

△「判らぬ奴だそれへ立て居つては叶かぬ、通れ」

松「何處へ通るンだよ、おろしい横柄などむらいだ

松「市中取締といへば歩兵だな、歩兵には江戸ツ子は稀だ、みんな遠方から出て來て鐵砲をかういで江戸中をぐる／＼まはつてゐる、イヤ御苦勞／＼マア水を一杯飲ましてくれ」

手桶にたゝいた水を柄杓で汲んでグット呑み

松「有難い／＼この水のう

では雷門前の壽美屋へ行つ



(波音映上) 悟道軒圓玉 (作)
丸尾至陽 (畫)



九五 無法な奴

お花は水責めにかかると
ころが助かつて假牢に入れられ、それにはさびしく番人がついた、とその日の午後二時ごろ傳法院に設けた市中取締の役所の前に雷門の方からこゝへ來たはま三十にならぬ若い男、大紋付の印半天を着て襟には白字

で大清としてあり、盲縞の股引にめくの足袋・散緒の麻裏草履、盲縞の腹掛、肩へ水淺黄の手拭をかけ酔つてゐると見えて千鳥足、漸くそれを踏しめて

○「なんだ／＼傳法院に幕が張つてあるぜ、珍らしい紋だな、寶づくしだぜこいつはひつぼうか、イヤー桶に水を汲んで砂が盛つてある、ともらいかな、葬式としては珍らしい、筒袖を着た妙な奴が立つてゐるせ、異人の様な姿だな、アメリカの五月人形の様だ」

△「これ、そこい立つては叶かぬ通れ」警護の者はしかり付けた

松「何處へ通るンだ」

△「判らぬ奴だそれへ立て居つては叶かぬ、通れ」

松「何處へ通るンだよ、おろしい横柄などむらいだ

丸尾至陽 (畫)

お前たちは棺わきだな送りのものが歸える時に御達方のところ有難度う存じますと禮をいふ役だな、オイ棺

脇、その水を一杯飲ましてくれ

△「これ／＼とむらいではないぞ、吾々は市中取締のものだ」

松「何んだ、大工が悪いか、

襟字を見ても判るだらう俺は大工だ、大工が悪いか、

堅氣のものになわをかけることが出来るか」

△「囮るな此奴は貴様は酒そばへ寄るな」

松「まア一諸に行きねえ、うめえものを食はしてやらア、何だなこんな物を持つてゐるンだ、これは俺があづかつて置く」

歩兵の持つてゐた鐵砲に手をかけて

△「不埒なやつは俺があづかるよ、こんな危ねえ物を持つていては壽美屋で客にしねえ」

△「不埒なやつは出でぬえ」

松「投げやがつたなさア勘弁付いた

番士もびつくりした

て飲むことにしやう、たまには若い女の世辭を聞きながら活のいゝ魚で飲むが宣い、お前なぞは山國から出来て生魚は見たことはなかう、魚はいつまでも頭を見て海にある時もこんな風だと思つてゐるだらう、鯛を見れば恵比壽様の佩してゐる刀の柄袋だと思ふだろ

くわ

ア、何だなこんな物を持つてゐるンだ、これは俺があづか

つて置く」

歩兵の持つてゐた鐵砲に手を

かけて

△「不埒なやつは俺があづかるよ、こんな危ねえ物を持つていては壽美屋で客にしねえ」

△「不埒なやつは出でぬえ」

松「投げやがつたなさア勘

弁付いた

番士もびつくりした

をなされた御愛兒様へ

小店にては聊か右御祝と日頃の御愛顧に酬ゆる爲左記の通り奉仕特賣致します。記念として何卒御用命の程伏して御願ひ申上ます。

1936年1月5日

平町五丁目

金七圓五十錢ヨリ又は皮バンド附

定價八十九ヨリ

ビクター・コロンビア

ボリドール

1936年1月5日

平町五丁目

金七圓五十錢ヨリ又は皮バンド附

定價八十九ヨリ